

クマーリラの文章義間接表示説

——『ブリハット・ティーカー』のものと
考えられる半詩節について——

金 沢 篤

O.

ミーマーンサー派の学匠クマーリラ (Kumārila : 7C)⁽¹⁾ は、パーツタ派の礎を築いた人物として知られるが、その重要な教義の一つである「文章」(vākya) 理論として、いわゆる「表示連関説」(abhihitānvaya-vāda) を確立し、それ以降プラーバーカラ派の「連関表示説」(anvitābhidhāna-vāda) との間に激しい理論抗争の歴史を生むことになった。したがって、今日クマーリラの「文章説」と言えば、「表示連関説」という言葉で代表させることが普通であるが、別の観点よりするならば、それを「文章義間接表示説」と表現することも可能である⁽²⁾。その「文章義間接表示説」をクマーリラ自身が自派の教説としてはっきりと宣揚した半詩節を、本稿では問題にしたい。言語学説を扱う後続の文献より屢々その半詩節の引用例が見いだされるが、それが見られない文献においても、それと符節を合わせるようなフレーズが極めて屢々見いだされる⁽³⁾。また、ミーマーンサー派の歴史研究の立場からもその半詩節が興味深いのは、それがクマーリラの現存する著作の中に見いだされない点である⁽⁴⁾。クマーリラの今は失われた著作、謎の『ブリハット・ティーカー』(Bṛhaṭṭikā : BT) の解明という重要な問題とも関わるものである。

クマーリラの文章説そのものについてはこれまでも様々に論じられ⁽⁵⁾、筆者も別の機会に論じたことがある。したがって、ここではその「文章義間接表示説」自体についての検討・言及は必要最小限に留めて、ただBTのものと考えられることもあるその半詩節についてだけ論じたい。またその半詩節と関わりを持つ限り、BTそ

のものについても言及せざるを得ないが、BT 研究を意図したものではない。BT に関しては、ミーマーンサー派の歴史、あるいはクマーリラを論じる研究の中で必ずといってよいほどに言及され、先年発表された針貝邦生博士の「*Nyāyasudhā* に引用される *Brhātṭīkā* について」(針貝)⁽⁶⁾に到るまで、BT そのものを主眼にした研究も既に幾つか発表されている。したがって、筆者のここでの関心は、クマーリラの文章義間接表示説に関わるその半詩節の辿った運命とその半詩節が帰属していた筈のクマーリラの謎の著作の両者に向けられることになる。

その半詩節に関する近・現代の学者の研究成果を踏まえた上で、筆者はこれまで知られていなかったその半詩節と共に一詩節をなす残る半詩節の引用例を新たに報告したい。そのこと自体は全くささやかな一歩に過ぎないとしても、その一詩節が BT に帰属することを確定できるとすれば、未だ不確定要素の多い BT そのものの研究にもなにかしき資するところがあるであろう。後に触れるように、その半詩節が BT 研究の中で取り上げられたのは、筆者の知る限りただ一度あるのみである。⁽⁸⁾ 筆者としては、本稿を、時に遭遇することのある出典未詳の一つの引用半詩節に対する一つの注記と考える。

I.

今日その問題の半詩節の最古の引用例と考えられるプラーバーカラ派の学匠シャーリカナータ (Śālikanātha : 10C) の『プラカラナ・パンチカー』(Prakaraṇapañcikā : PrPn)⁽⁹⁾, Vākyaṛthamāṭṛkā (VM) 章の当該箇所を以下に引こう。この(1)の末尾に引用される16音節からなるものが、問題の半詩節である。

- (1) *vārtikakāramiśrās tu—lākṣaṇikān sarvavākyaṛthān icchantaḥ padārthānām anvayāvabodhaśaktikalpanām nirākurvanti/ananvitāvastho hi padārtho 'bhihito 'nvitāvasthām svasambandhinīm lakṣayati/avasthāvasthāvator hi samban-*

dhāt, avasthāvaty abhihite, bhavaty evā'vasthā 'pi buddhisth-
ā/sarvatra ca sambandhini dr̥ṣṭe, sambandhyantare buddhir
bhavatiti kṛptam eva/tena nā'sti padānām anvitabodhane
śaktikalpaneti/tad āhuḥ—

“vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti nas sthitiḥ/”

(PrPn, p. 395, l. 24-p. 396, l. 6)

(2) しかしながら、尊きヴァールティカ・カーラ・ミシュラは、あらゆる文章の意味は間接表示的であると考えて、諸々の単語の意味に対して、[それら相互の] 連関を覚知させる可能性を想定することを、拒否されるのである。なぜなら連関していない状態の単語の意味が、[単語によって] 表示されたならば、そ[の単語の意味] 自体と関係を有する、連関している状態を、間接的に伝達するのだから。なぜなら、[或る] 状態と[或る] 状態を有するものの両者には関係が存在するのであり、[或る] 状態を有するものが表示されたならば、[或る] 状態[の方] もまた、知覚に上るものとなる筈であるから。さらに、あらゆる場合、[或る] 関係を有するものが見られたならば、関係を有するもう一方のものに関して、知覚が起こる、とまさしく想定されているのである。それ故に、諸々の単語に対して、連関しているものを[表示する] 可能性の想定は、ないのである、と[言われたのである]。すなわち、[次のように] 言われるのである。

「何故なら、文章の意味は、常に必ず、間接表示される、と
いうのがわれわれの定説である。」

“vārtikakāramiśrās” という言葉で、われわれは直ちにクマーリ
ラを想起する。その思想の特異性は半詩節の中の“sarvatraiva”と
いう言葉に端的に表わされている。単語の持つ意味表示機能として
のその「一次的な意味」(mukhyārtha) を表示する「直接表示機
能」(abhidhā) と、それが成立しない時に発効する「二次的な意

味」を表示する「間接表示機能」(lakṣaṇā) は既に周知のものであったが、それに対してクマーリラは、「文章の意味は、常に必ず、間接表示される」と言うのである。そのクマーリラの学説は、(1)を前主張と位置付けるブラーバーカラ派のシャーリカナータによって批判されるが、それを擁護したのが以下の(3)のように『タットヴァ・ビンドウ』(Tattvabindu : TB)⁽¹⁰⁾の終結部にその半詩節を引用するヴァーチャスパティ (Vācaspati : 10C) である。クマーリラの言語学説を初めて十全に解説したと考えられるヴァーチャスパティ以降のバーツタ派の数ある著作の中からその半詩節の引用例を予期したほどには回収できないが、それもある意味では無理からぬことであろう。クマーリラの現存する著作が如実に物語のごとく、クマーリラにあって、そうしたラディカルなテーゼを支えていたのは、書き記されたならば多大の紙面を占有もする複雑微妙な理論の積み重ねであったと考えられるからである。

(3) tasmāl lokānusāreṇa vaidikasyāpi padasandarbhasya
viśiṣṭārthapratyayaprayuktasyāviśiṣṭārthābhidhānamātreṇa
lakṣaṇayā viśiṣṭārthagamakatvam/svārthamātraparatve tu
prayojanābhāvena tasyāpy anupapatteḥ/yathāhur atra
bhavanto *vārtikakāramiśrāḥ*—

‘sākṣād yady api kurvanti padārthapratipādanam/
varṇās tathāpi naitasmin paryavasyanti niṣphale//
vākyārthamitaye teṣām pravṛtttau nāntariyakam/
pāke jvāleva kāṣṭhānām padārthapratipādanam//’
tathā ca

‘vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ sthitiḥ’//
iti/ (TB, p. 153, ll. 1-12)

(4) それ故に、世俗に順ずることより、[或る] 特定の意味の知と結び付いた単語の集まりが、ヴェーダ聖典の場合もまた、単なる特定ならざる意味の[直接]表示のみによって、間接表

示を媒介とすることにより、[或る] 特定の意味を了知させるものであるのである。しかるに、[単語の集まりが] 単にそれ自体の意味のみ [の表示] を専らとするものであるならば、目的が存しないことより、その [それ自体の意味] さえも成立しないが故に。このことに関して、尊き、ヴァールティカ・カーラ・ミシュラ尊者が言われるように。

「諸々の字音が直接的には、単語の意味を理解させることをなすとしても、無果なるこの [単語の意味を理解させることで] 終わるのではない。

「諸々の薪の焰が、燃焼に関して [間断なき：必然的なものである] ように、それら [諸々の字音] の、単語の意味を理解させることは、文章の意味の正知 [を与える] 作用に関して、間断なき：必然的なものである。」

また同様に、

「何故なら、文章の意味は、常に必ず、間接表示される、というのがわれわれの定説である。」

と。

この(1)(3)の二つの引用例によってともかくも問題の半詩節が召喚される議論の背景は知れるであろう。プラーバーカラ派とバーツタ派を代表する論客、シャーリカナータとヴァーチャスパティの両者によって Vārtikakāramiśra と呼ばれている人物が『シュローカ・ヴァールティカ』(Śloka⁽¹¹⁾vārtika : SV) の著者クマーリラであることは、問題の半詩節に先だって引用される(3)の二詩節が現行 SV, Vākyādhikaraṇa (VA) 342-343 と同定されることから、先ず確実である。

(1)の PrPn の刊本の校訂者 A. Subrahmanya Sastri は、その典拠を明示してはしないものの、その半詩節に関してかなり詳細な注記を付している。⁽¹²⁾A. Subrahmanya Sastri は、その Vārtikakāramiśra をクマーリラと考え、その箇所の記述を、クマーリラの現存著作、主に SV, VA の記述との関係で論じる他、シャーリカナー

タの PrPn, VM とヴァーチャスパティの TB との密接な関係を指摘する。さらに、その問題の半詩節に対するマドゥスーダナ (Madhusūdana : 16C) の『アドヴァイタ・シッディ』(Advaitasiddhi : AS)⁽¹³⁾における引用例をその箇所を明示し、それが問題の半詩節に対する一つのヴァリエントをなすものであることを指摘している。

一方、TB の刊本の校訂者 V. A. Ramaswami Sastri は、問題の半詩節に先立つ二詩節を、SV, VA 342-343 と明示してはいるが、問題の半詩節に関してはその典拠を “Vārttikam(?)”⁽¹⁴⁾として、それが PrPn, VM にも引用されていると指摘するに留まった。また、TB のテキストと全仏訳 (TBTr) を公刊した Madeleine Biarreau⁽¹⁵⁾は、TB 中の問題の半詩節の引用に対して、“Le sens de la phrase est toujours connu par implication. Telle est notre thèse.”⁽¹⁶⁾という仏訳を与え、その典拠に関しては、“(?)”⁽¹⁷⁾を付すのみである。さらに、TB の(3)の引用例を踏まえた、Indian Theories of Meaning (ITM) の著者 K. Kunjunni Raja は、“... the Bhāṭṭa Mīmāṃsaka-s explain that the sentence-meaning is always conveyed by the secondary power of words.”⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾と記した。文典派とミーマーンサー派の言語哲学についての研究書 The Philosophy of Language in the Light of Pāṇinian and the Mīmāṃsāka[sic] Schools of Indian Philosophy⁽²⁰⁾の著者 Pradip Kumar Mazumar は、その Chap.V : The Sentential Meaning — Mīmāṃsaka Theory, Sec. 1 : Abhihitānvayavāda の箇所で、パーッタ派の「文章義間接表示説」をかなり詳しく扱っているが、“Kumārila himself appears to have taken this position. We come across this oft-quoted verse of Kumārila—”⁽²¹⁾と述べて問題の半詩節を引き、その引用が、PrPn, TB, AS, ラーマヌジャチャーラヤ (Rāmānujācārya : 18C) の『タントラ・ラハスヤ』(Tantrarahasya : TnR)⁽²²⁾に見いだされると指摘し⁽²³⁾、“The source of this quotation is supposed to be the bigger work of Kumārila, viz. Vṛhaṭṭikā[sic] which is perhaps lost.”⁽²⁴⁾と記している。また、近

年 PrPn, VM の全英訳を含む三冊の研究書 (VMS1⁽²⁵⁾, VMS2⁽²⁶⁾, VMS3⁽²⁷⁾) を公刊した Rajendra Nath Sarma は、その問題の半詩節に対して “It is our position that the meaning of a sentence is, indeed, implied everywhere (*ie.*, in all case).” という英訳を与えたほか、その注記と目し得る箇所⁽²⁸⁾で lakṣaṇā に関してかなり広範な資料を使⁽²⁹⁾って解説を加え、問題の半詩節に関しては、“Rāmānujācārya, in his *Tantra-rahasya* mentions the expression ‘vākyārtho lakṣamāṇo[sic] hi ...’ etc., as belonging to the *Br̥haṭṭikā* of Kumārila.”⁽³⁰⁾と言及している。

以下には、A. Subrahmanya Sastri によって指摘されているマドゥスーダナの AS の引用例(5)と、Mazumdar が引用例があると明言し、R. N. Sarma が、問題の半詩節を「クマーリラの BT に帰属するものとして言及した」と明言したラーマヌジャチャーラヤの TnR の引用例(6)を見てみよう。なお、AS とは「ヴェーダーンタの四つの『シッディ』の一つ」⁽³¹⁾であり、TnR はプララーバカラ派の学説綱要書として夙に名高い著作である。

(5) ... ata evoktaṃ —“vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ *sthitam*/' iti/ (AS, p. 702, l. 2)

(6) nanu padārthānāṃ saṃsargabodhanaśaktisvikāre khalu gauravam/ananvitāvastho 'bhihito 'nvitāvasthāṃ lakṣayati/ avasthāvasthāvator hi sambandhas tāvad asty eva/ tad āhur *vārtikakārapādāḥ*—

vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiva *hi lakṣyate*/iti/ (Br̥haṭṭikā?)

tad ayuktam ity anye/neyaṃ lakṣaṇā/svārthāparityāgāt/ ... (TnR, p. 28, ll. 8-12)

PrPn の校訂者 A. Subrahmanya Sastri は、AS 中の引用例(5)に関して、そこに PrPn の用例とは異なる、“sthitam” とあること

を、指摘したのである。また、R. N. Sarma の指摘は TnR の(6)の引用例を踏まえたものであるが、そうであるとする、先に見た記述はあまりに杜撰なものであろう。先ず、Sarma の見た TnR 中の引用例は、(1)の PrPn 中の引用例とある意味ではかなり異なっている。⁽³²⁾その点について Sarma は何一つコメントしていない。そこに “vārtikakārapādāḥ” とあることより TnR の著者たるラーマヌジャーチャールヤがその半詩節をクマーリラのものと考えている、とは推定することができる。だが、その TnR の刊本のその箇所に Br̥haṭṭikā との名前を見いだせるにしても、それを直ちにラーマヌジャーチャールヤの見解とするのは、およそ常識を越えている。この “(Br̥haṭṭikā?)” の記述が、その刊本の校訂者 K. S. Ramaswami Sastri (or R. Shama Shastry) によって付されたものであることは間違いのないところである。⁽³³⁾ともかくもこの TnR の引用例が、(5)の AS の引用例と同様、問題の半詩節に対するヴァリアントをなすという点を確認しておきたい。

以上に見た通り、これまでミーマーンサー派の言語学説を問題にした学者たちによって注目されたこの問題の半詩節であるが、クマーリラの BT そのものに関心を寄せる学者によってそれが完全に見過ごしにされてきたというわけでもないことは、先にも述べた通りである。BT 研究史上、記念碑的論文の位置を得ている K. S. Ramaswami Sastri & A. Sankaran の “Kumārila and the Br̥haṭṭikā” ⁽³⁴⁾(KAB) の中では、“Further, on pp. 12-13 of the Vākyārthamātrkāṣṭṭi he has the following *vārtikakārapādās tu lakṣaṇikān sarvavākyārthān icchanta āhuḥ—vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatvaiva hi lakṣyate iti* It is very well known that the above view *viz.* that verbal judgment arises only through *lakṣaṇāvṛtti* (or the secondary significative capacity of words) is held by Kumārila and it is clear that Vārtikakārapādāḥ refers to him alone.” ⁽³⁵⁾と言及されているのである。だが、この K. S. Ramaswami Sastri & A. Sankaran の言及は、そこに見られる通り、シャーリカナータが引用の際に持ち出す “vārtikakārapādās” ⁽³⁶⁾

が、クマーリラを指示してのものであることの例証を与えるためのものである。

この問題の半詩節に関してこれまでの学者たちによってどれほどのことが問題にされてきたかは、以上によってほぼ知られるものとする。ここでわれわれが問題にしなければならない点は、その問題の半詩節の第八番目の音節を構成する“hi”という単語の意味であろう。つまり、「理由」(hetu)を意味する hi なのか、「限定(強調)」(avadhāraṇa)の意味なのか、それとも他の意味なのか、ということである。引用文(詩節)の解釈では等閑にされがちな不変小辞の解釈に関してのものである。筆者は(1)(3)の試訳としての(2)(4)において、全く便宜的にそれを hetu の意味にとり、「何故なら」とした。TB 中のその半詩節の仏訳を与えた Biardeau は特にその単語に表立った意味を与えていない。また、PrPn 中のその半詩節の英訳を与えた R. N. Sarma は、avadhāraṇa の意味に解し、“indeed”という訳語を与えている。半詩節のうちに hi を二つも含む(6)の TnR の場合はどう解釈すればよいのであろうか。現段階ではとうてい決着をつけられる問題ではないが、ただその点に注意しておくことだけは無意味ではあるまい。以下には節を改めて、筆者がこれまでに収集している問題の半詩節の他の引用例を報告し、その意義、帰属等についてなお若干の考察を加えてみたい。

II.

クマーリラが「文章義間接表示説」の保持者であることは“very well known”と K. S. Ramaswami Sastri & A. Sankaran は記している。確かにそれを裏付けるような記述の数々は、クマーリラ以後の学匠たちの種々の著作より容易に得られる。にも拘らず、問題の半詩節の引用例には、「屢々」というほどにも出会えない、というのが実情である。しかも、その半詩節が PrPn 等から摘出されてから久しいにも拘らず、その半詩節と共に完全な一詩節をなす筈の残る半詩節についての報告がいつに現れなかった。筆者自身も長年探しあぐねてきたが、このほど偶然それに遭遇し、正直のところ

その「興奮」の中にわかに本稿が構想されたのである。だが、それを報告する前に、その半詩節だけの未報告の引用例を見ておくべきであろう。

パラメーシュヴァラ (Parameśvara III : 16C) の『ジャイミニーヤ・スートラールタ・サングラハ』 (Jaiminīyasūtrārthasaṅgraha : JSAS)⁽³⁷⁾ には、ミーマーンサー派の根本経典、ジャイミニ (Jaimini : 1C) に帰せられる『スートラ』 (Jaiminīyasūtra : JS) I-1-2 “codanālakṣaṇo ’rtho dharmah” を註釈する箇所⁽⁷⁾のように、シャンカラ・バツタ (Śaṅkara Bhaṭṭa : 17C) の『ミーマーンサー・バーラ・プラカーシャ』 (Mīmāṃsābālāprakāśa : MBPr)⁽³⁸⁾ には⁽⁸⁾のように引用されている。共に PrPn, TB のものと同型であることを先ずは確認したい。このことは、ミーマーンサー派内部の著作 PrPn (1), TB (3), JSAS (7), MBPr (8) に見られるこのものこそ、クマールラの問題の半詩節の原型であることを証するであろうか。

(7) lakṣaṇaśabdaḥ pramāṇavacanah/ tasyāpi svaśabdaḥ vihāya tena pratipādanam vākyārthasya dharmatvāt tasya padārthadvāreṇa lakṣyamāṇatvam abhipretya/ *tathā cokaṭam* —

‘vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ sthitiḥ’//iti/
(JSAS, p. 11, ll. 16-19)

(8) tad uktaṁ bhāvārthādhikarāṇe (A. 2 Pā. 1 A. 1) yadi hi dharmasvarūpam abhidhīyeta tataḥ kiṃ padena padenocyate iti vicāro yujyeta lākṣaṇikatve tv ayukta iti/ vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ sthitiḥ iti ca/ lakṣaṇā ca padārthadharmo na padadharmah/...

(MBPr, p. 74, ll. 3-6)

(7)を与える JSAS とは、BT の名前と共に BT の詩節がいくつか回収される数少ない著作の一つであり、BT 研究の上では重要な著

作である。⁽³⁹⁾(7)からだけでは窺いしれないものの、(7)に先立つ JS I-1-1 の註釈部の末尾において、“br̥haṭṭikā⁽⁴⁰⁾”、及び “br̥haṭṭikā⁽⁴¹⁾kāreṇa” という言葉と共に BT のものと考えられ、そのように確定するほかない幾つかの詩節の引用が見られる。しかもそれらと JS I-1-2 の註釈部に引用されるこの半詩節との間には、他の引用、及び他の学匠の名前を指示する名称などは介在していない。したがって、(7)中の斜体字で表わされた “tathā coktam” の力をも借りて、この半詩節を BT と結び付けることが可能になると言えるのである。この JSAS の引用例は、これまでこの半詩節に言及した、あるいはそれを BT と結び付けた学者たちの誰一人によっても指摘されたことがなかった。おそらくこれこそが、筆者の知る限り、この半詩節を BT のものと断ずる唯一の証拠であろう。

それに対して、MBPr の引用例(8)は、これまでの引用例の多くとは異なって、クマーリラを指示する Vārtikakāramiśra (or pāda) と結び付けられてはいないものの、その典拠を直接に指示する “bhāvārthādhikaraṇa” という言葉と結びつけられているらしいという点で重要であろう。校訂者による割注にも明らかな通り、ミーマーンサー派の体系にあって、JS II-1-1 から始まる部分を指す Bhāvārthādhikaraṇa⁽⁴³⁾ という名称がその半詩節の帰属箇所を意味すると解し得るからである。(8)冒頭の “tad uktam” を直接受けると考えられる、斜体字で表された “iti” と “iti ca” によって区切られた “yadi hi dharmasvarūpam abhidhiyeta tataḥ kiṃ padena padenocyate iti vicāro yujyeta lākṣaṇikatve tv ayukta” と問題の半詩節 “vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ sthitir” という二つの引用のうちの前者が、クマーリラの現存著作『タントラ・ヴァールティカ』(Tantravārtika : TnV)⁽⁴⁴⁾ の Bhāvārthādhikaraṇa に相当するものを持つ。その散文を以下の(9)に引こう。

(9) yadi hi dharmasvarūpam abhidhiyeta tataḥ kiṃ padena padenocyate iti vicāro yujyeta lākṣaṇিকে tv ayuktaḥ//

(TnV, ii, p. 336, ll. 19-20)

この(9)の(8)中のものとの相違点は、ただ(8)で “lākṣaṇikatte” とあるものが、“lākṣaṇike” となっていることばかりである。また、(9)中斜体字で示した “kiṃ padena padena” の部分は、TnV が註釈をなすシャバラ (Śabara : 2C) の『バーシュヤ』(Śābarabhāṣya : SBh) 中の一節である。⁽⁴⁵⁾したがってシャンカラ・バツタによって⁽⁴⁶⁾ “tad uktam” として引かれたものは、Bhāvārthādhikaraṇa が今の場合意味するクマーリラの TnV のその箇所⁽⁴⁷⁾に帰属すると推定すべきかもしれない。だが、現行 TnV には、その第二番目の引用句、つまり問題の半詩節の方は見いだされ⁽⁴⁸⁾ない。この事態をどう解釈すべきであろうか。一つには、問題の半詩節を含む現行 TnV とは別の TnV のヴァージョンを想定することである。また、一つには、(8)中の “bhāvārthādhikaraṇe” を問題の半詩節と切り放すことであらう。さらに、もう一つは、(7)によって何とかクマーリラの失われた著作 BT に結び付けられそうな問題の半詩節の置かれている箇所が、TnV と同じく JS II-1-1 等を扱う箇所、すなわち TnV 同様の Bhāvārthādhikaraṇa というセクション⁽⁴⁹⁾であり、かつその部分が現行 TnV と (ほぼ) 共通の「散文」をも持つ、という場合であろう。だが、ここからだけではそのいずれの解釈にも決着を下すことは出来ない。

そして、筆者が遂に発見したと考えた問題の半詩節を含む完全な一詩節の引用例が以下に引く (10) である。そして (11) である。孰れもヴェーダーン派の学匠チトスカ (Citsukha : 12C) の『タットヴァ・プラディーピカー』(Tattvapradīpikā : TPr) 中のものである。⁽⁵⁰⁾

- (10) tasmāt samabhivyāhṛtapadakadambakasmār-
itapadārthānām parasparānvayapratyayo lākṣaṇikaḥ
śābdaś ceti sarvam avadātam/tathā coktaṃ
mīmāṃsāvārtikakāramiśraiḥ—‘na vimuñcanti sāmāthyam
vākyārthe pi padāni naḥ/vākyārtho lakṣyamāṇo hi sar-
vatraiveti ca sthiti’r iti/ (TPr, p. 154, ll. 5-8)

- (11) *bhaṭṭapādaiś ca vākyārthasya sarvatra*
lākṣaṇikatvasvikārāt/‘vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti
ca sthiti’r iti/ (TPr, p. 155, ll. 13-14)

TPr 中ほとんど相接するようにしてあるこの二例によってわれわれはさらに重要な知見を得ることが出来る。チトスカによっても問題の半詩節が “*mimāṃsāvārtikakāramiśraiḥ*” = “*bhaṭṭapādaiś*”, すなわちクマーリラのものと考えられていることが知れることに加え, (10)からは遂に問題の半詩節がその前半詩節と共に見いだされた点である。問題の半詩節に新たなヴァリアント (“*naḥ(s)*”) に代わる “*ca*”) が現れたことも看過すべきでないが, その(10)にある問題の半詩節に先立つ前半の半詩節がクマーリラの現存 SV に見いだされることが, 何よりも重要であろう。その SV, VA 229 をその前後の一詩節と共に以下の(12)に, それに対する山崎次彦氏の和訳 (山崎⁽⁵¹⁾) を(13)に引こう。

- (12) *padārthānugataś caiṣa vākyārtho gamyate sadā/*
na viśiṣṭārthatā tasmād vākyasvātantryasādhini//228//
na vimuñcanti sāmānyam vākyārtheṣu padāni naḥ/
tanmātrāvasiteṣv eṣu padārthebhyaḥ sa gamyate//229//
aśābde cāpi vākyārthe na padārtheṣv aśābdatā/
vākyārthasyeva naiteṣāṃ nimittāntarasambhavaḥ//230//
 (SV, p. 641, ll. 6-7, 12, 15, 19, 21)

- (13) (全ての単語はそれ自体の明確な意味を持ち,) 文章の意味は, つねに, この単語の意味にしたがって理解されるのである。ゆえに (文章が) 限定された意味を持つことは, 文章が (単語の意味から) 独立のものであることを証明するものではない。

われわれにとっては, 文章の意味に関しても, (それを構

成する) 諸単語は (文章の意味を決定する) 力を失うものではない。これ [単語] がそれ [単語の意味] のみ (を表わす) に終るがゆえに、それ [文章の意味] は単語の意味 (の結合関係) によって理解されるのである。

文章の意味はシャブダに属するものでないにしても、単語の意味はシャブダに属するものでなければならぬ。なぜならば、後者には文章の意味におけるような、(単語とその意味との間の) 媒介的な因が存在しえないからである。

(山崎 p. 18, ll. 22-28, p. 19, ll. 5-7)

(10)(12)を較べてみれば明らかなように、“vākyārthe 'pi”と“vākyārtheṣu”という若干の違いはあるにしても、この二つの詩節の前半詩節を同一のものと見なし得る。また、二つの後半詩節をどちらかがどちらかのヴァリエーションであるなどとは考え難い。この事態をわれわれはどう解釈すべきであろうか。(8)の引用例に関して立て得た解釈が、この場合には TnV ではなしに SV との関わりで、そのまま有効である。もっとも素直な解釈は、クマーリラ自身が (ほぼ) 同一の半詩節を持つ異なった詩節を書き記したというものであろう。そしてその一つを現存する SV のうちに、もう一つを現存しない BT と推定される著作のうちに残したというものである。問題の半詩節を含む(12)に見られる通りの一詩節をクマーリラに帰すチトスの記述が仮に真実を伝えるものだとすれば、問題の半詩節を含む現行 SV とは別のいま一つの SV を想定するという解釈よりも、この解釈の方が有望であろう。BT が現行 SV と共通の詩節を含むことがこれまでも確認され、なおかつ SV よりも詳細・大部(?)であるらしいとの推定がなされているからである。また、いずれにしても(10)(12)中の詩節前半に見られる“naḥ”が、(1)(3)(7)(8)中の問題の半詩節の原型とも考え得る半詩節中の“naḥ(s)”に何等かの影を落としているように見えることも指摘しておきたい。

さらにわれわれは、このチトスカの記述を支持するような引用例を見いだす。文典派の著名な学匠ナーゲーシャ (Nāgeśa : 18

C) の『スポータ・ヴァーダ』(Sphoṭavāda : SpV) の現行本の校訂者 V. Krishnamacharya 自身による SpV の註釈『スポーディニー』(Subodhinī : SpVSB)⁽⁵³⁾ 中の引用例である。それを以下の(14)に、それに対する脚注 1 を(15)に引こう。

(14) ataḥ padāny eva prathamam padārthān avabodhya anantaram vākyārtham api lakṣaṇayāvabodhayanti/yathā-huḥ—

“*na vimuñcanti sāmāthyam vākyārthe 'pi padāni naḥ/ sarvatraiva hi vākyārtho lakṣya eveti naḥ sthitiḥ//*”

(Ślokavārtikam, Vākyā. Ślo. 229)

iti/

(SpVSB, p. 54, ll. 9-14)

(15) yady api tatrottārardham anyathā paṭhitam, tathāpi Nāgeśena Mañjūṣāyām eṣa pāṭha āśritaḥ/sa evātra pāṭh-āntaram apy āha—“*vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiva hi dṛśyate//*” iti/p. 434. Laghumāñjūṣā. Chow : Sans. Series, 46.

(SpVSB, p. 54, f.n. 1)

この(14)(15)の Krishnamacharya による引用例を見て合点が行かない場合でも、そこに箇所までも明示してある、ナーゲーシャのもう一つの著作『ヴァイヤーカラナ・シッダーンタ・ラグ・マンジュシャー』(Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumāñjūṣā : VSLM)⁽⁵⁴⁾ のナーゲーシャ自身による引用例を見る必要がある。やはり二箇所に見れるその引用例を(16)(17)に引こう。

(16) tad uktaṁ *bhaṭṭapādaiḥ*—

“*na vimuñcanti sāmāthyam vākyārthe 'pi padāni naḥ/ vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiva ca dṛśyate//*”

(Ślokavā · Vākyādhi · 7 Ślo · 229) iti/

hi = *yataḥ/sarvatraiva* = ekapadaprayoge · 'pi 'praviśa'

‘piṇḍim’ ity ādau/etadarthaś cāgre vakṣyate/evaṅ ca vāk-
 yārthatvaṃ spaṣṭam evoktam/tatra pratyekaṃ padasya
 sāmārthyam iti na yuktam, vinigamanāvirahāt/padānām
 tadviśayasāmārthyātyāge yuktyantaram apy uktam *taiḥ*—

“sākṣād yady api kurvanti padārthapratipādanam/
 varṇās tathāpi naitasmin paryavasyanti niṣphale//
 vākyaarthamitaye teṣāṃ pravṛttau nāntariyakam/
 pāke jvāleva kākṣhānām padārthapratipādanam//”

(Ślokavā · Vākyaḍhi · 7 Ślo · 342-343) iti/

evaṅ ca padatātparyaviśayatā vākyaśambaddhatvaṃ ca
 spaṣṭam eva/evaṅ ca padavṛttiḥ kevalapadārthabodhikā,
 vākyaavṛttis tu viśiṣṭārthasyaiva bodhiketi bodhyam/

(VSLM, p. 401, l. 19-p. 402, l. 11)

(17) ... na ca tātparyaviśayibhūtavākyaarthānupapattis
 tadbijam, niyamataḥ pūrvaṃ tātparyajñānasyāpi kalpanā-
 ’pekṣayā śaktikalpanasyaivaucityāt/

“na vimuñcanti sāmārthyam vākyaārthe ’pi padāni naḥ//”

(Ślokavā · Vākyaḍhi · 7 Ślo · 229)

iti pūrvārdhokte ’rthe *hetutvenopanyastāyām*—

“vākyaārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiva *ca* dṛśyate/”

iti *bhaṭṭakārikāyām* ‘lakṣyamāṇaḥ’ ity asya pratiyamāna ity
 arthaḥ/‘dṛśyate’ ity asya pratitiviśayatvenānubhūyata ity
 arthaḥ/

“*sarvatraiva hi vākyaārtho lakṣya eveti* *ca* sthitiḥ/”

iti pāṭhe ‘lakṣyaḥ’ ity asya pratitiviśaya ity arthakasya ‘asti’
 iti śeṣaḥ/sarvatraiva hi vākyaārthaḥ pratiyamāno ’sty eveti
 sthitiḥ vakṣyamāṇarītyā vākyaikadeśanyāyenety arthaḥ/ata
 eva kevalapadaprayoge ’pity arthakam ‘sarvatraiva’ iti sār-
 thakam ity āhuḥ/

(VSLM, p. 416, ll. 7-20)

この、チトスカから数世紀を隔てたナーゲーシャによる引用例(16)には、クマーリラを意味する筈の “bhaṭṭapādaiḥ (=taiḥ)” の下に、問題の半詩節を含む(10)とほぼ同一の一詩節が、(3)にも見られたクマーリラの現行 SV,VA 342-343 と共に引用されているのである。ナーゲーシャが(16)では問題の半詩節中の “hi” を “yataḥ” で解釈し、(17)では、後半詩節を前半詩節に対する hetu と意義づけていることも見落とすべきではない。ただし、SpVSB の著者 Krishnamacharya も、この VSLM の校訂者 Sabhāpati Śarmā Upādhyāya も、自分が手にしている一詩節の後半詩節が PrPn や TB にも引用されている出典未詳の問題の半詩節と見なし得るものであることや、BT を巡る現代の諸研究には無頓着らしく、その一詩節の前半詩節より、その一詩節を現行 SV,VA 229 に対する「いま一つの読み」と処理している。また(14)に見られる通り、SpVSB の著者たる Krishnamacharya によって採用された問題の半詩節に対するかなり趣きを異にするヴァリエントは、(17)中に見られるナーゲーシャの議論を前提にしてのものであろうことは Krishnamacharya による注記(55)からも確実である。“vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiva” の部分は、これまでの問題の半詩節の引用例の全てにおいて不変であった。それに代わる “sarvatraiva hi vākyārtho lakṣya eva” の出現に注目すべきであろう。(17)には “bhaṭṭakārikāyām” という言葉が使われていて、SV を意味するものと推定されている Kārikā⁽⁵⁶⁾ を想起させる。とはいえ、そこからだけではそれらのクマーリラの詩節の典拠が SV であるとも BT でないとも断定できない。ただナーゲーシャ⁽⁵⁷⁾が BT そのものを手にしていないとだけは言えるかもしれない。なお、VSLM の刊本の校訂者 Sabhāpati Śarmā Upādhyāya が、(16)の問題の半詩節を含む一詩節に関して脚注を施し、“ślokaṁ tu … ity uktam”⁽⁵⁸⁾ として、(12)の現行 SV,VA 229 の一詩節をそのままに引いていることも記しておきたい。

ナーゲーシャによる(17)やそれを踏まえた Krishnamacharya の(14)に明らかな、問題の半詩節に対するヴァリエントは、ナーゲーシャ

に先立つやはり文典派の学匠カウング・バッタ (Kaunḍa Bhaṭṭa : 17 C) の『ヴァイヤーカラナ・ブーシャナ・サーラ』 (Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra : VBhusS) 第14章 Sphoṭanirṇaya (SN) ⁽⁵⁹⁾ ⁽⁶⁰⁾に見られる一詩節を受けたものと、筆者は考える。以下の(18)にはその部分を、(19)にはその一詩節に対して校訂者 S. D. Joshi が与えた英訳を引こう。

(18) *iyam eva mīmāṃsakānāṃ vedāntaikadeśināṃ ca gatiṛ ity āha—*

sarvatraiva hi vākyārtho lakṣya eveti ye viduḥ/

bhāṭṭās te 'pīttham evāhur lakṣaṇāyā grahe gatiṃ//65// (7)

bhāṭṭā iti tadanuyāyināṃ vācaspatikalpataruprabhṛtināṃ upalakṣaṇam/ (SN, p. 102, ll. 1-4)

(19) (*Kārikā* 65). The followers of the Bhāṭṭa school, who maintain that the relational meaning (*vākyārtha*) is in all cases conveyed by the secondary function, also thus declare that (secondary function) *lakṣaṇā* is operated in apprehending (the verbal knowledge of a sentence). ⁽⁶¹⁾

(SN, p. 165, ll. 3-7)

さすがに Joshi は、この SN 中の K-65 を見て、TB 中のクマールラのものと考えられる問題の半詩節を想起したのであろう、以下の(20)の如き訳注を付すことを忘れなかった。

(20) Kumārila quoted in *Tattvabindu*, Annamalai University, p. 153 : *vākyārtho lakṣyamāṇo hi sarvatraiveti naḥ smṛtaḥ/* See also *ibid.*, p. 131 : *labhyate ca samabhivyaḥārānyathānupapattyā padānāṃ anvitārthaparāṇāṃ svābhidheyārtharūpasamavetānvitāvasthāpratyāyanaṃ lakṣaṇā/*

(SN, p. 165, f.n. 56)

だが、先に引いた TB の引用例(3)にも明らかな通り、この訳注中の Joshi による問題の半詩節の引用にも既に誤記が混入している。誤記・誤植は避け難いとはいえ、今クマーリラの発した半詩節の運命を問題としている時だけに、等閑にはできない。(20)中の問題の半詩節の “smṛtaḥ” は、“sthitiḥ” である。さらに Joshi によって TB より引用されているいま一つの方にも誤記がある。すなわち、“lakṣaṇā” ではなく “lakṣaṇayā”⁽⁶²⁾ である。それはともかく、(18)に見られる K-65 を含む VBhusS (≡ SN) のカーリカー部分は、カウンダの叔父に当るバットージ・ディークシタ (Bhaṭṭoji Dikṣita : 16 C)⁽⁶³⁾ に帰せられると言われるが、その K-65 中の斜体字の部分こそ、(17)のナーゲーシャによる「いま一つの読み」(pāṭhāntara) の拠り所であろう。そしてその(17)の「いま一つの読み」を拠り所として、現代の Krishnamacharya は、(14)に見られるように、「いま一つの」SV, VA 229 を捏造したのでであろう。だが、(18)中のバットージに帰される K-65 の前半詩節の “iti ye viduḥ” に先立つ問題の箇所が、クマーリラの問題の半詩節をパラフレーズしたもの、すなわち「その半詩節と符節を合わせるようなフレーズ」ではなく、問題の半詩節に対するヴァリエントと言うべき「いま一つの読み」を直接引いたものであるとの可能性も否定できない。この、ヴァリエントの問題に関連しては、シュリー・ヴィーララーガヴァーチヤルヤ (Śrī Vīrarāghavācārya : 20C) の『パラマールタ・ブーシャナ』(Par-amārthabhūṣaṇa : PBhus)⁽⁶⁴⁾ に以下の引用例(21)があることを指摘しておきたい。この PBhus とは、ヴェーダーンタ・デーシカ (Vedānta Deśika : 14C) の『シャタ・ドゥーシャニー』⁽⁶⁵⁾ (Śatadūṣaṇī : SDus) に対する註釈書と言うべき著作である。

- (21) tadabhiprāyeṇaiva, “sarvatraiva hi vākyārtho lakṣya eve”
ti prayogaś cet—tattvamasīty atra padalakṣaṇāyās tan na
gamakam/ (PBhus, p. 105, ll. 5-6)

さて、以上に見たところが、筆者が問題の半詩節に関連して収集

している資料のほぼ全てである。今やわれわれは、(ほぼ) 同一の半詩節を共通に持ち、⁽⁶⁶⁾ 片方には問題の半詩節を含む異なった二つの一詩節を手にしてしている。さらに問題の半詩節に関しては、種々のヴァリエントがある。しかもどうやら、問題の半詩節はやはり BT に帰属するもののようである。考察をさらに進めるためには、いま一度問題の半詩節の最古の引用例を与えるシャーリカナータの PrPn を見てみる必要がある。PrPn, VM には実は現行 SV, VA 229 に相当するもの、すなわち問題の半詩節を含まない一詩節の方も、問題の半詩節にやや先だって引用されているのであった。それが、以下に引く⁽⁶⁷⁾ ②である。その前半詩節は現行 SV と細部において異なり、チトスカやナーゲーシャによってもたらされる⁽⁶⁸⁾ (10)や(10)中の一詩節の前半詩節と同一である。つまり(12)に見られる通り、現行 SV, VA 229ab には “vākyārthe 'pi” ではなく “vākyārtheṣu” とあった。G. Jhā の英訳 (SVTr) ⁽⁶⁹⁾ に関してのものであるような印象をすら与える⁽⁶⁸⁾ (13)の山崎氏の和訳にも明らかな通り、その後半詩節の “sa” (単数・主格) が、それに先立つ vākyārtha と解するほかない状況で、なおかつテキストでは、“vākyārtheṣu” (複数・処格) ⁽⁶⁹⁾ という読みが踏襲されてきたのである。現行 SV の刊本にはそれに対するヴァリエントの存在も伝えられず、また誤植であるとの訂正もない。そしてこの現行 SV の刊本のこの読みに対して幾度か翻訳が与えられたにも拘らず、これまで一度としてその点が問題にされたことはなかった。⁽⁷⁰⁾ その前半詩節と後半詩節の間の不整合(?)を訝しく思いつつも、写本 (ないし刊本) にある読みを尊重したということであろうか。その整合性を重んずるならば、このクマーリラとかなり時代を接したシャーリカナータの PrPn の引用を頼りに訂正する作業がなされてもよかったと、筆者は考える。

②) tad āhur vārtikakāramiśrāḥ—

“na vimuñcanti sāmāthyam vākyārthe 'pi padāni naḥ/
tanmātrāvasiteṣv eṣu padārthebhyaḥ sa gamyate”//

[Ślo. Vā. 7. Ślo. 229] iti/

問題の半詩節の引用例(1)とこの(2)よりするならば、シャーリカナータが、(1)の問題の半詩節を、SV,VA のものと推定される(2)の半詩節とは別のものと解して引用していることが明らかである。ここからだけでは、シャーリカナータの引用する問題の半詩節に先立つ、シャーリカナータによっては引用されなかった前半詩節が、現行SV,VA 229 の前半詩節と同一であるともないとも断定できないが、シャーリカナータの時点において、現行SV,VA 229 の詩節は、問題の半詩節とは別に、(ほぼ)現行通りに存在していたとだけは推定できるのである。(1990.8.18)

註

- (1) 本稿中参考までに、学匠の名前の後に付した年代は、全て Karl H. Potter, ed., *Encyclopedia of Indian Philosophies : Bibliography* (2nd Revised Ed), Delhi, 1983 に基づく。
- (2) パーッタ派の abhihitānvaya 説とは、「vākya を構成している śabda (pada) は、śabdārtha = abhihita に従事し、vākyārtha = abhihitānvaya は śabdārtha に基づいて知られる」とするものである。śabdārtha を ākṛti (jāti, sāmānya) と考え、vākyārtha を常に viśiṣṭa なものと捉えるパーッタ派の立場よりすれば、「vākyārtha は常に間接的に知られる (間接表示される)」ということになる。その詳細、ブラーバーカラ派の anvitābhidhāna 説との関わり、ミーマンサー派の教理史上の位置付けを窺う上の参考文献等に関しては、拙稿「ミーマンサー学派の文章論—『タットヴァ・ビンドウ』の所説を中心に」『岩波講座 東洋思想第7巻 インド思想3』岩波書店(東京)1989年8月 120-138頁を参照されたい。
- (3) 本文引用(1)の冒頭の “lakṣaṇikān sarvavākyārthān” などがそうであるが、その他に例えば Pārthasārathi の Nyāyaratnamālā (G.O. S., No. 75, Baroda, 1937) 中の “ata eva vākyārtho lākṣaṇika iti mīmāṃsakāḥ” (p. 125, l. 10) や、Mānameyodaya (A.L.B.S., 105, Madras, 1975, 2nd Ed) 中の “vayaṃ tu padārthā lakṣaṇayaiva vākyārthaṃ bodhayantīti brūmaḥ” (p. 96, ll. 3-4) など を挙げるに留

める。なおこのパーツ派の著作よりの二例からも見て取れるように、Kumārila の問題の半詩節が持っていた “sarvatraiva” が影を潜めている。

- (4) BT は, Mādhavasarasvatī (16C) (or Mādhavabhārati acc. to KAB, p. 526, l. 34) の Sarvadarśanakaumudī (SDK : 筆者未見) 中に記載された Kumārila の五冊からなる著作リストのうちに Kumārila の現存三著作と共に数えられていることで、注目されたものである。これまで Tattvasaṅgraha 等の著作からかなりの数の詩節が回収されている。また、BT の他にそのリストには、Madhyamaṭīkā (MT) と呼ばれる著作が挙がっているが、その実体については何一つ分っていない。その Kumārila の著作リストとは、S. Kuppaswami Sastri, “Further Light on the Prābhākara Problem”, Proceedings and Transactions of the Third Oriental Conference Madras ... 1924 (PTTOCM1924), Madras, 1925, pp. 474-481 によれば “tatra bhāṭṭācāryāṇaṃ pañca vyākhyānāni bhāṣyasya ; ekā *brhaṭṭīkā*, dvitīyā *madhyamaṭīkā*, tṛtīyā *ṭīptīkā*, caturthī *kārikā*, pañcamam *tantravārtīkām* uktānuktaduruktacintakam/” (p. 475, ll. 22-24) のことである。なお、ここに見られる “uktānuktaduruktacintakam” との記述によって、C. Kunhan Raja は Introduction in *Brhātī of Prabhākara Miśra*, Madras Univ. S.S., No. 3, Part II, Madras, 1936 で, “That means that in this work there is a revision of what has been said, addition of what has not been said, and correction of what has been wrongly said, in previous works. ... From the statement of Mādhavasarasvatī it is a complete revision of an earlier work.” (p. 9, ll. 7-14) と記している。だが Rājaśekhara (10C) の Kāvya-mīmāṃsā (G.O.S., No. 1, Baroda, 1934, 3rd Ed) の, Bhāṣya との関わりで Vārtika 一般を規定するものと言うべき “uktānuktaduruktacintā vārttikam” (p. 5, ll. 7-8) から知れる如く、SDK 中のその句は、C. Kunhan Raja の如く SBh に対する Kumārila の TnV 等のいわば複註相互の関係を表したものと見なすべきではないように思われる。

- (5) 註(2)参照。
 (6) 針貝→『印仏研』37-2 平成1年3月 957-951頁。
 (7) 針貝、及び後出 KAB, K. S. Ramaswami Sastri, “Forgotten Kārikās of Kumārila” (FKK), PTFOCA1926, Allahabad, 1927, Vol. I (Proceedings), pp. 81-84 (FKK 1) ; JORM 1927, 1928, pp. 131-

- 144 (FKK 2), E. Frauwallner, “Kumārila’s Bṛhaṭṭikā” (KB), WZKSO, vi, 1962, pp. 78-90. 筆者自身は、本稿で扱う半詩節と別の BT に関わりのある一詩節に関して、「クマーリラのものと考えられる一詩節について一注記のための覚書」『東方学』81輯 平成3年1月(予定), 「ミーマーンサーというタルカークマーリラのものと考えられる一詩節について(2)一」『駒大仏教学部論集』22号 平成2年10月(予定)等を書き、BT に関説した。註34参照。
- (8) Cf. KAB, pp. 524-525.
- (9) PrPn → Banaras Hindu Univ. D.S., No. 4, Varanasi, 1961.
- (10) TB → Annamalai Univ. S.S., No. 3, Annamalai, 1936.
- (11) SV → SV with NR, Ratnabharati S. 3, Varanasi, 1978.
- (12) Cf. PrPn, pp. 396-398, f.n. & pp. 415-416, *Parīṣiṣṭam*.
- (13) AS → Parimal S.S., No. 7, Delhi, 1988 (Reprint of N.S.P. Ed).
- (14) Cf. TB, Appendix, p. 21, ll. 2-3.
- (15) TBTr : *Le Tattvabindu de Vācaspatimśra*, Pondichery, 1956.
- (16) TBTr, p. 52, ll. 16-17.
- (17) TBTr, p. 52, l. 17.
- (18) ITM, A.L.S., 91, Madras, 1969 (2nd Ed).
- (19) ITM, p. 210, ll. 7-11.
- (20) PL, Calcutta, 1977.
- (21) PL, p. 102, ll. 3-4.
- (22) TnR → G.O.S., No. 24, Baroda, 1956 (2nd Ed).
- (23) Cf. PL, p. 102, ll. 6-9.
- (24) PL, p. 102, ll. 9-11.
- (25) VMS 1 : *The Vākyārthamātṛkā of Śālikānatha Miśra with His Own Vṛtti*, Delhi, 1987. [tr.]
- (26) VMS 2 : *Mīmāṃsā Theory of Meaning (Based on the Vākyārthamātṛkā)*, Delhi, 1988.
- (27) VMS 3 : *Verbal Knowledge in Prābhākara-Mīmāṃsā*, Delhi, 1990. [comm.]
- (28) VMS 1, p. 22, ll. 18-19.
- (29) Cf. VMS 3, pp. 40-48 ; VMS 2, pp. 25-42.
- (30) VMS 3, p. 40, ll. 21-23. Cf. VMS 2, p. 33, ll. 27-29.
- (31) 前田専学著『ヴェーダーンタの哲学—シャンカラを中心として—』平楽寺書店(京都)1980年6月 49頁7-8行。
- (32) 問題の半詩節の最後の要素は、本稿で見る如く、かなり変動が見

られ、それぞれそれなりに解釈できるように思われるが、この “sarvatraiva hi lakṣyate” と終わる TnR の引用例が最も奇妙である。註③⑥参照。

(33) Cf. TnR, Preface by K. S. Ramaswami Sastri (esp. p. viii) & Pariśiṣṭam (esp. p. 76).

(34) KAB → PTTOCM1924, Madras, 1925, pp. 523-529.

(35) KAB, p. 525, ll. 1-7.

(36) A. Subrahmanya Sastri の刊本によった本文引用(1)には、“vārti-kakāramiśrās” とある。A. Subrahmanya Sastri の刊本にはそれに対する異読も伝えられていない。また、ここで明らかに PrPn のものとして引かれている問題の半詩節が、(1)に見られるものとは異なり、むしろ(6)の TnR のものと同じの形を取っていることも不可思議である。

註③②参照。

(37) JSAS → Tr. S.S., No. 156, Trivandrum, 1951.

(38) MBPr → Ch. S.S., No. 16, Benares, 1902.

(39) JSAS については、針貝に貴重な報告がある。筆者も前掲拙稿にてそれに言及した。

(40) JSAS, p. 9, l. 17.

(41) JSAS, p. 10, l. 10.

(42) JSAS, p. 9, ll. 18-22 には、二詩節半の BT よりの引用が見られ、p. 10, ll. 11-20 には、BT-kāra による五詩節の引用が確認される。針貝博士は、その内の前者について言及された。針貝 953-952頁参照。

(43) Bhāvārthādhikaraṇa を構成する領域は JS II-1-1~4 に対する註釈部であり、現行 TnV, ii, pp. 333-358 に相当する。ミーマーンサーの体系における各 adhikaraṇa については、Kevalānandasaraswati, ed., *Mīmāṃsādarśanam : Jaminimīmāṃsāsūtrapāṭhaḥ*, P.P.M.G.M., Wai-Satara, 1948 が詳しい。

(44) TnV → *Mīmāṃsādarśana*, An. S.S., No. 79, 7pts, Madras, 1970-1975.

(45) SBh → *Mīmāṃsādarśana*, An. S.S., No. 79, 7pts, Madras, 1970-1975.

(46) Cf. SBh, ii, p. 336, l. 6.

(47) だが、サンスクリット語の散文として見た場合、(8)中の “bhāvārthādhikaraṇa” を問題の半詩節と切り放して解釈することは極めて不自然である。

(48) 従来の BT 研究では、BT は SV との関わりで論じられることが

普通であった。C. Kunhan Raja は註(4)中の SDK の記述に対して、Kumārila は、SBh の最初の部分に対して入念な BT を、真中の部分に対して中くらいの MT を、最後の部分に対して短い Ṭuṭṭikā を書いたと解釈し、さらに “Then perhaps, he wrote a very lengthy commentary for the entire portion in the form of kārikās and this is the Ślokaṣvārtika, or the Kārikā mentioned by Mādhavaśaraśvatī. An additional prose commentary for the middle portion may have been written after this, and this is Tantravārtika. Perhaps he did not write a later commentary for the last portion.” (C. Kunhan Raja, op. cit., p. 9, ll. 26-31) と推定している。註(4)参照。

(49) BT が「散文」を持つことについては、前掲針貝に「また BT はこれまで韻文しか発見されていないが、Mīmāṃśāsūtrārthasaṅgraha (=JSAS: 筆者注) には BT の散文の引用が見いだされる。それについての説明は今後の課題としたい。」(952頁19-21行) とある。針貝博士のこの記述とからめて、筆者も前掲拙稿で BT における散文の引用に関して言及した。

(50) TPr → Vrajajīvan Prachyaḥharati G.M., 19, Delhi, 1987 (Reprint of N.S.P. Ed).

(51) 山崎: 「クマリーラの「文章論」[II] …」『三重県立大学研究年報』VII. I 1971年3月 1-22頁。

(52) 註(2)(42)参照。また、註(7)に掲げた諸論文を参照されたい。

(53) SpVSB → SpV by Nāgeśa Bhaṭṭa, A.L.S., No. 55, Madras, 1946.

(54) VSLM → K.S.S., 163, Varanasi, 1973 (3rd Ed).

(55) だが、Nāgeśa による(16)の引用例と比較して見れば明らかにように、この(16)中に見られる Krishnamacharya による VSLM よりの引用にも誤りがある。そこには、TnR の引用例と同様に、“hi” が二個含まれている。これは、(17)に見られる問題の半詩節に対する決定的なヴァリエント “sarvatraiva hi vākyārtho …” 中の “hi” に Krishnamacharya が引きずられての結果の誤りであろう。

(56) たとえば、Śrīdhara (10C) の Nyāyakandalī (G.J.G.M., 1, Varanasi, 1977), p. 627, ll. 11-16 には, “tantraṭīkāyām,” “kārikāyām” という言葉と共に、それぞれ、現行 TnV, SV 中の一詩節の引用が見られる。註(4)(48)参照。

(57) 筆者が敢えてそう言うのは、今日には伝わらない BT が、どの時点で消失したのかという問題を提起するためである。

(58) Cf. VSLM, p. 401, f.n.

- (59) VBhusS → VBhusS with Prabhā & Darpaṇa, K.S.S., 188, Varanasi, 1969 (2nd Ed).
- (60) SN → The Sphoṭanirṇaya of Kauṇḍa Bhaṭṭa, ed. & tr. by S. D. Joshi, Poona, 1967.
- (61) Cf. VBhusS, Prabhā, p. 488, l. 5.
- (62) Cf. TB, p. 131, ll. 8-10.
- (63) Cf. SN, Preface by S. D. Joshi, p. i, ll. 5-9.
- (64) PBhus → Ubh. V.G.M., Madras, 1959.
- (65) Cf. PBhus, “A Tribute” by K. Bhashyam.
- (66) このような事態は, FKK2 や KB において, Tattvasaṅgraha, Sarvajñasiddhi における引用例を検討した K. S. Ramaswami Satri や E. Frauwallner も逢着したものであるが, SV と BT(?) に関してのみ起こるのではない。筆者は拙稿「ミーマンサーというタルカ」において, 同一人と考えられる Bhāsarvajña (10C) が, 異なる二著作において現行 Manusmṛti XII-106 と, それと後半詩節を異にする一詩節を引用している事例について言及した。Cf. FKK2, pp. 134f; KB, pp. 80f.
- (67) SVTr : G. Jhā, tr., Ślokaavārttika, B.I. 146, Calcutta, 1985 (Reprint).
- (68) Jhā の用いたテキストが如何なるものかは必ずしも定かではないが, Jhā は, “vākyārtheṣu”ではなく, “vākyārthe 'pi”を踏まえて, SV, VA 229 を “For us, even in the signification of the sentence, the words (composing it)…” (SVTr, p. 527, ll. 21-22) と訳したように思われる。山崎氏は註(69)に記す如く, 現行 SV, VA 229 の読みをそのまま採用して, なおかつその和訳は, Jhā に従ったように見える。
- (69) 筆者は, SV, VA 229 に関して, Ch. S.S. 本にも “vākyārtheṣu”とあることを確認した。その刊本に依拠している山崎18頁脚注(83)にもその通りに引用されている。Ch.S.S. 本に依拠したと明示している (Mazumdar, op. cit., p. 145, l. 13) Mazumdar が, SV, VA 292 と明示した (p. 97, ll. 22-23 & p. 103, l. 6) 上で, “vākyārthe 'pi”を含む詩節を引用しているのは疑問である。また, やはり同じく Ch.S.S. 本に依拠している K. S. Ramaswami Satri & A. Sankaran が, KAB 冒頭で, PrPn における SV, VA 229 の本稿(22)の引用例を掲げてそれを “Ślokaavārttika p. 909.” (KAB, p. 523, l. 17) と同定しているが, その違いについては何らコメントしていない。
- (70) 筆者が使用した刊本と実質的に同一の Prāchyabhārati S. 本に依

拠して、巧妙な英訳を与えた Francis X. D'Sa は、*Śabdaprāmāṇyam in Śabara and Kumārila, ...*, Vienna, 1980, p. 169, f.n. 12 に SV,VA 229 を引用しているが、やはりそのテキストの読みに関しては何一つ言及していない。註(69)参照。(1990.11.25)

東
洋
学
報

第七十二卷
三三四